The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「1968年」伝説の周縁で ： 『ニューレフト・レヴュー』に見るモダニズムの残照
Author(s)	山田, 雄三
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2008, 2007, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77337
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「1968年」伝説の周縁で

――『ニューレフト・レヴュー』に見るモダニズムの残照――

山田　雄三

1.「1968年」を系譜化する

世界規模の動乱の年として伝説化された「1968年」から、今年で40年になる。この機に乗じてか、ここ数年「1968年」を回顧する本が出版メディアをにぎわしている。絓秀実が編集した『思想読本1968』と、それを絓ひとりで発展させた『1968年』、小阪修平の『思想としての全共闘世代』、かつての共産党系のアクティヴィストたちによる実録『素描・1960年代』、アカデミックな思想史としては『新左翼の遺産』。[1] アプローチやスタンスの違いはあるものの、どれも定年を迎えたか迎えつつある全共闘世代の「総括？」めいたものとして読める。

わたしはその1968年に生まれた。成長するにつれ、その年が何かすごい年であったことをよく耳にするようになる。わたしには以前から疑問があった。この「1968年」という年に、実際に日本では何が起きたというのか。年鑑をひも解くと、この年の1月、国際的な北爆（米空軍による北ベトナム爆撃）反対運動の流れからか、空母エンタプライズの佐世保入港阻止運動が起きたと書いてある。パリの5月革命と時を同じくして、東大や日大で学生紛争が起きているが、もとは医学部生のインターン問題や学生自治をめぐる内部的な事情が絡んでいたらしい。それから「映像で見る昭和史」のようなテレビ番組であまりにおなじみの安田講堂「攻防戦？」。しかし、その余波となると、わたしたちの世代には分かりにくい。蓮實重彦も言っている。「1968～69年に日本で現実に起こったことの大半は、愚にもつかないくだらないことだと思っています。・・・今1968年を神話として語ることにもほとんど意味はないと思う。実際に、「体制側」であるとないとにかかわらず、日本で政治的にあれほどの愚行ばかりが起こった時期はない」。[2]

事情は極西のイギリスでも同じである。確かに1968年のパリ5月革命やプラハの春は、広東やサイゴンだけでなく、ヨーロッパでも社会変動が起こるのではという期待と幻想を抱かせた。冷戦構造と「豊かさの時代」とのXY軸に定点決定されて身動きがとれなくな

---

[1] 絓秀実編『思想読本 1968』（作品社、2005）、絓秀実『1968年』（ちくま新書、2006）、小阪修平『思想としての全共闘世代』（ちくま新書、2006）、『素描・1960年代』（同時代社、2007）、大嶽秀夫『新左翼の遺産―ニューレフトからポストモダンへ』（東大出版会、2007年）.

[2] 『思想読本 1968』、28-9ページ.

っていたヨーロッパもレフト・シフトできるのではないかと。しかし、イギリスの「1968年」は政治的には空白のままだった。1968 年、レイモンド・ウィリアムズはウィルソン内閣の改造を国会議事堂の外側から揺さぶろうとして、『メーデー宣言』を起草するものの、社会を動かすまでの反響を生み出せなかった。ニューレフトの活動とは一線を画し、そのため新ニューレフト運動と呼ばれた学生運動が起きたのも 1968 年だった。しかし、学生自治や奨学金助成問題が発火点となった「スチューデント・パワー」も、社会には冷ややかに受け止められた。その辺りの事情は、ロンドン大学経済学研究所（LSE）の学生運動が、「文化的なマルサス主義」と解説されていたことからもうかがい知れる。その解説にならうとこうなる。「若者たちは階級のステータスを失うことに反抗しているだけ。ブルジョアやプチブルの家庭に生まれた彼らは、その階級の特権を享受し、社会階層を上昇するために勉強したものの、同じ目論見をもつ若者が多すぎた。特権的な場所に空きがないのだ」。学生の反抗はどことも接合することなく、戦後に教育が民主化される過程で生じた小さな歪みに矮小化されてしまう。[3]

繰り返すようだが、「1968 年」は極東でも極西でも政治的に空白だった。「1968 年」をトピックとした近年の出版物の著者、編者たちも、そのことは百も承知である。その上で、伝説化した「1968 年」というパッケージをほどいて、再歴史化する作業を行っている。とはいっても、その作業は取りつく島を与えてくれない。冷戦構造と核による均衡、ポストコロニアル状況と世界経済、修正ケインズ主義と福祉国家、都市住環境問題と過疎化、若者の消費活動、学歴社会と落ちこぼれの問題、ヒッピーやドラッグなど新しい抵抗のスタイル、人種や民族や女性性への意識などなど、さまざまな要素がこの時代を取り巻いているからだ。そこで、ここではニューレフトの系譜を追いかけてみようと思う。「1968 年」が世界的な現象であったとして、その起点のひとつは 1950 年代に始まるイギリスのニューレフト運動であったと思う。それは、（別なところで論じたことだが）20 世紀モダニズムの強い影響下に始められたことだった。[4] ここでの試みはひとつ。20 世紀のモダニズムという文脈において「1968 年」へと連なる系譜を見てみることである。

2．行動主義の台頭と機動戦への衝動

1968 年はトロッキーの夢が語られた時代であった。サルトルやアルチュセールが興奮したように、巨大な資本と軍事力を有する大国を前にしてこれまで「ありえない」と思われていた抵抗運動や革命が、チェ・ゲバラやホー・チ・ミンの指導のもと世界のあちらこちらで起きていた。当時の『ニューレフト・レヴュー』（以降、『レヴュー』）には、こうした

---

[3] 「文化的なマルサス主義（cultural malthusianism）」の解釈については、次の論文が詳しく批判を加えている。Andre Gorz, 'The Way Forward,' *New Left Review* 52 (November-December, 1968), p. 62.

[4] 山田雄三「ニューレフトと呼ばれたモダニストたち—1950 年代の国際情勢とイギリスの「文化・政治」動向」、『言語文化共同研究プロジェクト 2006・ポストコロニアル・フォーメーションズ II』（大阪大学大学院言語文化研究科、2007）、41-50 ページ.

第 3 世界の出来事を「世界革命」として解説した記事や論文が多く書かれている。「ペトログラードからサイゴンへ」と表題が付けられたヨラン・テルボーンの論文では、ロシアの三月革命からサイゴンの人民解放戦線までの歴史が、階級闘争の必然的な展開であることが強調されている。[5] また、中国の「文化大革命」についての情報が著しく少なかった時代を反映してか、広東における紅衛兵の蜂起を、毛沢東流の「永続革命」、ないしは官僚化した社会の再流動化として賞賛した記事もある。[6]

イギリス本国でも、新ニューレフトと呼ばれる学生グループが登場し、10 月の LSE、11 月のバーミンガム大学での座り込みを始めとして、「ベトナム連帯キャンペーン（The Vietnam Solidarity Campaign: VSC)」のデモ行進までも指導していた。新ニューレフトであるからには、それまでのニューレフトとの違いが強く意識されていた。少しうがった見方をするならば、旧世代のニューレフトを仮想敵とすることで、ひとつにまとまった感じすらある。新ニューレフトの言説のなかでは、旧世代のニューレフトが科学的な政治理論を作る努力を怠ったこと、直接的な政治行動に慎重なことが徹底批判される。旧世代のニューレフトを象徴する出来事は、1950 年代末の反核キャンペーン（CND)、オルダーマストン行進であった。論文「ペトログラードからサイゴンへ」のなかでは、この行進が「依然帝国主義時代にあって、階級闘争の具体的な活力をまったく理解できずに、正義感だけで反植民地主義を唱えるかたちを取った」と回顧されている。[7] 旧世代を代表するウィリアムズは、1967 年に開かれたリベラル無党派の会合のなかで、「総力戦としての闘争という考え方も、生の営みの全容の一側面にすぎない」と述べて、行動主義からは一歩身を遠ざけていた。[8] これと、VSC の次の声明を比べてみたら違いは明らかだ。「ドイツの社会主義学生同盟から日本の全学連、合衆国やこの VSC の反戦運動にいたるまで、高まりつつある若者の力は政治的無気力や消極的でじりじりする平和主義とは手を切り、今戦われている闘争と共闘する方向に向かっている」。[9] 生活やコミュニケーション、教育など「生の営みの全容」における民主化を目指す旧世代の発想は、根本にある階級の矛盾をむしろ隠してしまう全体論として、非難の的となってしまう。

このような 1960 年代後半の世界動向を受けてか、1957 年に始まる共通文化に向けての「長い革命」は、「1968 年」神話の周縁での活動を余儀なくされる。先ほど言及した 1967 年の会合とは、カトリック系のジャーナル『スラント』(若い頃のテリー・イーグルトンが主宰したもので、カトリックの人道主義とマルクスの社会改革との融合を目指していた) が母体であり、会合のテーマは「共通文化の諸問題」であった。また、同じ年に『メーデ

---

[5] Göran Therbon, 'From Petrograd to Saigon,' *New Left Review* 48 (March-April, 1968), pp. 3-11.
[6] John Collier, 'The Cultural Revolution in Canton 1968,' *New Left Review* 48 (March-April, 1968), pp. 63-71.
[7] 'From Petrograd to Saigon,' p. 8.
[8] Terry Eagleton & Brian Wicker (ed.), *From Culture to Revolution* (London: Sheed & Ward, 1968), p. 301.
[9] *Vietnam Solidarity Campaign Bulletin* No. 14 (May 1968), p. 13.

一宣言』も出版された。その主張は、ウィルソン政権のテクノクラシーを解体して、ふつうの人びとのふつうの暮らしのなかで起こっている諸問題に対処できる制度や機関（議会制や労働党とは別のもの）を設立することであった。そのためにはまず、既存の代弁＝表象制度があるために会う機会を奪われている「人びとと新たに出会って、新しい活動を始めたい」と宣言している。[10] さらに、この『メーデー宣言』の増補版は、翌年パリの5月革命と時を同じくして発表される。しかし、時代のスピードは速かった。「まず会って話をしてから活動のかたちを考えよう」という悠長な声は、LSEの学生や『レヴュー』の行動主義者の耳に届くはずもなかった。

1960年代の半ば、ウィルソンが政権を獲得したあたりから、1950年代のニューレフトとは何だったのかを振り返る動きが活発となるが、新旧のニューレフトが描く「50年代」はまったく違っていた。1965年、「イギリスのレフト」という論文で、ウィリアムズはイギリスのレフトに根強いフェビアン主義とイギリスに欠けているマルクス主義とをつなぐ（接合する）ことが肝心だと説いた。『レヴュー』の若い編集者ペリー・アンダソンにしてみると、そうした何もかもつなごうとする旧世代の発言は「大衆迎合であって、社会主義以前」のスタンス以外の何物でもなかった。[11]

さて1968年になると、アンダソンはかなり戦略的に、旧世代にとって暗黙の理想であった調和的な全体性に、矛盾と軋轢と敵対のくさびを打ち始める。イギリスのカルチュラル・スタディーズは、ウィリアムズの感動的なリフレインで知られるエッセイ、「文化はどこにでもある」（1957）で幕を開けた。それはマシュー・アーノルド以来、社会の中上流層の価値を帯びて広められてきた高級文化にたいして、マリノフスキー人類学の文化概念をぶつけたものだった。アンダソンは皮肉をこめてその過去を振り返る。「今日、文化とは何を指すのか。あらかじめ範囲を決めておきたい。わたしたちは人類学的な文化概念になど興味はない。それでは、文化をある社会に見られる慣習や象徴の総体としてとらえてしまうからだ」。[12] アンダソンはさらにつづける。「機能主義の深刻な限界はいまでも限界のままだ。それは、矛盾のまったくない全体化だった。社会の慣習がコンパクトに一つにまとまると考えた段階で、定義上、構造的な敵対関係を扱えなくなってしまった」。[13] アンダソンの主張を要約するとこうなる。イギリスのニューレフトが脆弱なのは、文化を考えるときにこの予定調和の全体性が念頭にあるからだ。イギリスがもっとも革命に近かった1930年代、オピニオン・リーダーになったのはいつもきまって「詩人や自然科学者」だったと。[14] つまり、1930年代のモダニズムが最初の躓きとなったというわけだ。そして、50年代のニューレフト運動も30年代のモダニズムの強い影響下に進められ、挫折した。1968年、もう一度仕切り直しをするには、イギリスの文化概念に欠けているパーツを、つまり全体性の概

[10] Raymond Williams (ed.), *May Day Manifesto* (Harmondsworth: Penguin, 1968), pp. 11-12.
[11] Perry Anderson, 'The Left in the Fifties,' *New Left Review* 29 (January-February, 1965), p. 17.
[12] Perry Anderson, 'Components of National Culture,' *New Left Review* 50 (July-August, 1968), p. 5.
[13] *Ibid.*, p. 49.
[14] *Ibid.*, p. 11.

念に矛盾と軋轢と敵対というパーツを投入しなければならない。そのためには、社会学理論とイギリス型のマルクス主義こそ必要なのだと、彼は執拗に繰り返す。

3．カルチュラリストたちのモダニズム陣地戦

「1968 年」は前衛の行動主義とそれを後衛で支える闘争理論の構築を、その特色としていた。それは、上のセクションで見てきたとおりである。しかしながら、この前衛と後衛との幻想の陣形の周縁では、依然として大陸の新マルクス主義とイギリスの「共通文化」との融合が試みられていた。この現象は、アンダソンの強い影響下とはいえ、必ずしも党派的ではなかった『レヴュー』というトポスでも見られた。このセクションでは、『レヴュー』を中心に、「1968 年」におけるモダニズムの残照を観察してみたいと思う。

もっとも典型的にはアントニオ・グラムシの受容の仕方に現れた。[15] 曖昧さを残すグラムシの市民社会概念をどう解釈するかに現れた。市民社会と国家装置との関係をめぐっては、後者に最終審級における決定力を認めるアルチュセール派と市民社会における陣地戦に期待するカルチュラリスト（文化尊重派）とのあいだで、解釈の相違は明らかであった。『レヴュー』全体の論調としてはアルチュセール派が優勢であったけれども、「共通文化」を考えるための試みは断片的ながらつづいていた。例えば、この時期にマイケル・パーソンズは、同時代の実験的な現代音楽やポップスを紹介、解説している。面白い例がある。ローリング・ストーンズの『裏通りの少女（*Backstreet Girl*）』を解釈したものだ。「複雑な感情は、あからさまに横柄で偉そうぶっている歌詞とメロディの柔らかさ甘美さとのあいだの軋轢から導かれたものだ。ブレヒトがどっかに書いていた。劇で必要な音楽は、役者たちがそれを聞いて確実に反発したくなる感情を引き出す音楽だ。この曲は、それを単純なかたちで凝縮している。歌詞のあからさまな意味合いに反発することで、音楽は歌詞を相殺し、ことばのもつインパクトを何か別なものに変えている」。[16] パーソンズは、新マルクス主義のブレヒト理論とウィリアムズの「感情構造」論を使いながら、ローリング・ストーンズを市民社会の陣地戦へと引きずり込もうとする。

「市民社会の陣地戦」という言い方をしたが、ここで言う「市民社会」にはモダニストらしい偏向も見られた。その偏向をひと言で集約すると、こうなるだろうか。モダニストはメトロポリスで考える。『レヴュー』の歴史で 1962 年に起きたホールからアンダソンへの編集者交代劇の背景にも、ロンドンを拠点とするレフトと中部イングランド産業都市を拠点とするマルクス主義歴史家グループ（E．P．トムソンなどがいた）とのあいだの内紛があった。結果、後者が脱退することで、『レヴュー』はメトロポリス色を強めていった。

とはいえ、メトロポリスの強調の置き方はさまざまだった。パリの 5 月革命の直前に、『レヴュー』はベンヤミンの「パリ論」を翻訳掲載している。その論で、ベンヤミンは複

---

[15] 1968 年の 9・10 月号（No. 51）に、『ニューレフト・レヴュー』はグラムシの特集を組んでいる。

[16] Michael Parsons, 'Discussion—Rolling Stones,' *New Left Review* 49 (May-June, 1968), pp. 85-86.

製技術が生活の隅々にまで浸透した消費都市パリを「廃墟」として描き出していた。パリのアパートの室内は、市民の私的空間というよりも、市民の「包装（casing）」になる。「生活することは生活することの痕跡となる。・・・カバーやソファーの覆い、箱や包装が大量に作られ、日々の生活用品の痕跡はそのなかに収められている」。[17] さらに、19 世紀に登場した探偵小説では、これらの痕跡が調べ上げられ、犯人は紳士でもごろつきでもなく、いつもきまって「中流の一般市民」になる。こうしたメトロポリスの現象を見回した上で、ベンヤミンは言う。「〔複製物という〕ブルジョアの記念碑が瓦解するのを待つまでもなく、わたしたちはこれらの記念碑を廃墟としてとらえはじめている」と。[18] つまり、メトロポリスの存在自体が、ひとつの政治・経済・文化システムの崩壊を象徴していることになる。

1960 年代の『レヴュー』には、ベンヤミンの複製技術論と並んで、ルカーチの物象化の概念もよく出てくる。この概念では、商品のフェティーシュ化が人と人との関係、労働諸関係を数量化できる関係に変え、その関係が現代のわたしたちの意識に沁みわたっていることが問題になっていた。こうした意識を脱物象化する場所はメトロポリスをおいて他にはないと考えるレフトもいた。ピーター・バージャとスタンリー・プルバーグの 2 人は、都会でのカルチャー・ショックこそ脱物象化のためのカンフル剤だと考える。「文化接触は旧い世界の物象化した停滞に活力を与えることになるだろう。ひとつ重要な例を挙げると、さまざまな民族が交じり合っている都会の真ん中で起きていることがある。人びとは交じり合うことで、生まれながらの民族性を緩やかにし、人間的なものにすることがよくあるからだ」。[19] 『レヴュー』の外にいたが、ホールも似たような考えをもっていた。合衆国のヒッピーに取材したホールは、1968 年にこう報告する。「遠い田舎の隠れ家よりも都会にあるいくつかの縄張りが、ヒッピー文化の真意を特徴的に表しているようだ。ヒッピー社会は、都市生活の真ん中に牧歌的な囲い地を建設する試みだと考えるほうがよくわかる。彼らはそうすることで、田舎の純朴さとモダニティ（現代性）という 2 つの文化的衝動をつなぎ合わせようとしているのだ」。[20] ディアスポラのような現実の移動であれ、ヒッピーのトリップのような仮想の移動であれ、メトロポリスでは世界規模の移動が交差していた（ように思われた）。そのメトロポリスで、彼らモダニスト＝レフトは思考していた。

資本主義システムの構造的矛盾よりも矛盾の変化に注目するカルチュラリストの著述は、「1968 年」に支配的な全体性理論に弾力をもたせることにもつながった。後の 1970 年代初頭、バーミンガムにおいて「文学の社会学」運動が起きるが、（当事者たちも認めるとおり）そのとき依拠された全体性理論はウィリアムズの「感情構造」論であった。社会に共

---

[17] Walter Benjamin, 'Paris—Capital of the Nineteenth Century,' *New Left Review* 48 (March-April, 1968), p. 84.
[18] *Ibid.*, p. 88.
[19] Peter Berger & Stanley Pullberg, 'Reification and the Sociological Critique of Consciousness,' *New Left Review* 35 (January-February, 1966), p. 70.
[20] Stuart Hall, 'The Hippies: An American "Moment",' *CCCS Selected Papers*, Ann Gray et al. (ed.), vol. 2 (London: Routledge, 2007), p. 152.

感される感情が全体化の結果であると同時に全体化の要因だとするこの論は、自己撞着を冒しているようで分かりにくいが、緊張と敵対とを孕みながらたえず流動する構造を想定していた。この「感情構造」論と密接に関係していて、ウィリアムズ自身も何度も言及したのが、1920 年代のモダニズム運動のなかから生まれたロシア・フォルマリズムであった。フォルマリズムと言えば、文化実践を離れ、テクスト至上主義を唱えたと俗流に解釈されていたが、1960 年代後半には、フォルマリズムの動態論的性格をとらえ直す動きが活発になる。1966 年の『レヴュー』では、ヤコブソンとトゥイニャーノフの言語理論が紹介されているが、紹介者たちはこう解説していた。「社会の経済レベル、政治レベルと言われるときのレベルということばに矮小化の響きがあることを嫌って、2 人はシリーズということば遣いをして、個別的なレベル研究に釘を刺した」と。[21] さらに、英訳された本文には、社会の全体性について、次の記述が見られる。「通時的な科学は諸現象を機械的に寄せ集めるだけの発想しかしなかったが、共時的な科学はその寄せ集めをシステムや構造という概念で置き換えた。システムの歴史はそれ自体システムである。・・・どんな共時的なシステムにもその過去と未来とが、そのシステムを構成しており、両者を切り離すことはできない」。[22] この発想と「感情構造」論との類似は明らかだ。「感情構造」論では、どの時代のどの社会にも「残余的」「支配的」「萌芽的」な要素が結合と離反を繰り返しながら社会全体の矛盾を変化させているのであって、これこそ矛盾の根源だと特定できる要素はないと考えられた。この点においても、社会の矛盾の根源的要因を特定（固定化）し、それを弁証法的に乗り越えようとする行動主義者との温度差は明らかに感じられる。

4．モダニズム思考の限界

ここからは、世界規模の歴史事件であった「1968 年」のトピックに戻り、モダニズムの系譜にあるレフトがなぜ国際的な影響力をもつにいたらなかったのかを考察する。その取りかかりとして、ひとつ疑問を投じてみよう。「レフトにとって、東京はメトロポリスだったのか？」1968 年には世界有数の資本力と労働力を有していた東京を世界システムのどこに位置づけるかで、レフトたちの見解は分かれた。例えば『レヴュー』の「5 月革命特集」では、こう書かれていた。「彼ら〔パリの学生たち〕はアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの学生たちと手を結び合って、革命闘争に入った。日本やイラン、アルゼンチンでの大学占拠がヨーロッパの現実とは隔絶した、別世界の政治のように思えた時期もかつてはあった。今やベルリン、ローマ、ニューヨーク、ロンドン、サンフランシスコがチュニスやモンテビデオと一線に並んでいる」。[23] ここでの日本はアメリカのヘゲモニーにたいする反植民地的カウンターとして位置づけられている。対照的に、前述のテルボーンは、資本

[21] R. Jakobson & J. Tynyanov, 'Problems of Literary and Linguistic Studies,' *New Left Review* 37 (May-June, 1966), pp. 59-61 に付けられた introduction (p. 59)を参照。
[22] *Ibid.*, p. 60.
[23] 'Introduction to Special Issue on France May 1968,' *New Left Review* 52 (November-December, 1968), p. 5.

主義先進諸国における日本の前衛的働きを強調している。「合衆国、イギリス、ドイツやその他の国では、労働者階級を総動員するもっとも重要な仕事は、もちろんまだ手つかずだ。日本を別とすると、ごくごく周辺的にしか動いていない」。[24] こちらで表象される日本は、幅広い知識人層が労働者と連帯する前衛国である。この2つの例から考えると、東京は人民戦線のサイゴンに見えたり、ベンヤミンの描くパリに見えたりして、どうも玉虫色である。そのことは、『レヴュー』のなかで「Zengakuren」という文字が（漢字が意味することとは無関係に）呪文のように使われていることとも関係する。[25] こうした事がらは、イギリスの、ひいては西欧のレフトが非西欧との接合なり連帯なりを考えるときに用いたパースペクティヴ（遠近法）の問題でもある。その点を少し詳しく『レヴュー』に見てみたい。

1967年の7・8月号に、東アジア史研究家のジョン・ハリデーが「日本—アジアの資本主義」という論文を寄稿している。戦後の日本が1950年代の軍需特需から20年足らずの短い期間に、国内総生産世界2位の経済大国に発展した要因を、論者は日本の思想や政治体系、産業構造に求めている。要因の分析は多岐にわたり、明治維新の中央集権化、宮沢喜一など合衆国を熟知した政治家の登場、小中高の教師の経済的貧窮と労働者意識などさまざまである。「展望」と小見出しのついたこの論の掉尾を、論者は次のことばで締めくくる。「合理化された資本主義システムの例として日本に着目したのは、マルクスがおそらく最初だっただろう。このシステムの効率の良さは、徹底的な搾取によるものだ。平均生産力と生活水準との乖離は、南アフリカを除くと先進国でもっとも深刻だ。当然のことながら、経済成長は政治的な反論を封じている。それでも、日本社会は潜在的な対立を排除しようとつねに努力しているにもかかわらず、未解決の矛盾に呻吟しつづけているのだ」。[26]

この論文の分析にたいして、すぐさま日本の立場からの反論がなされた。同じ年の11・12月号で、ヒデ・イシグロ（石黒ひで）は次のように述べて、ハリデーが試みた比較の盲点を突いている。「こう指摘しておきたい。イギリスでレフトが搾取のことを口にするとき、労働者にとって「こんなにいい時代はなかった」というおきまりの見解に反論するときにもちだされることが多い。ところが、レフトが日本について同じことを口にするときには、西欧の伝統的な右翼の見解をどうも支持しているかに聞こえる。つまり、日本経済の競争力を国際的に高めているのは、搾取と安い労働賃金というわけだ」。[27] 確かにイシグロが反論したように、ハリデーには玉虫色のダブル・スタンダードがある。その物差しを当てられると、アジアの労働者は有能力化され、同時に無能力化される。

西欧のレフトが期待と幻滅を味わった中国の「文化大革命」についても、同じことが言える。1960年代を通して「文化大革命」を肯定的に紹介してきた『レヴュー』であったが、

---

[24] 'From Petrograd to Saigon,' p. 10.

[25] 西欧での言説では、草創期の全学連、安保期のブント、民青系の全学連、三派全学連など、1960年代のさまざまな局面に区分されて論じられることはほとんどない。

[26] Jon Halliday, 'Japan—Asian Capitalism,' *New Left Review* 44 (July-August, 1967), p. 19.

[27] Hide Ishiguro, 'Discussion: "Japan—Asian Capitalism",' *New Left Review* 46 (November-December, 1967), p. 81.

しだいにそれが中国共産党内部の内紛にすぎないことが分かると、完全に手のひらを返す。サルトルが 1970 年代に入っても中国に愚直なまでにコミットしたことを考えると皮肉だが、そのサルトルにたいしてアンダソンほか編集委員は 1968 年末にインタヴューを試み、こう問いかけている。「文化を通しての革命がパラドックスに陥ったのは、それが中国ではそもそも不可能だったからでしょう。文化を通しての革命を発案したのは中国でしたが、この種の革命は西欧のもっと進んだ国でこそ可能だったんではないでしょうか」。[28] サルトルはこの誘導尋問にイエスともノーともとれる回答をしているが、それと比べると『レヴュー』編集部の潔さには驚くばかりである。彼らの言説にも、ハリデーが日本の経済を眺めるときと同じパースペクティブが働いているようだ。線遠近法は屋内や都市建築を描く場合には有効でも、自然風景を描くには役に立たない。レフトの遠近法では、遠景は容易に近景になり、また遠景にしりぞく。アジアに触発されて起きた 1968 年の新ニューレフトは、結局のところ、非西欧とつながるためのパースペクティブをもつにいたらなかった。

さらに、1968 年の新ニューレフトが駆使する連帯のレトリックは、敵を簡単に同定するために、かえって敵からも同定されやすい位置に身をさらしてしまう。1960 年代の合衆国で高まった公民権運動は、もともとはアフリカ系移民のエンパワーメントであり、運動家たちは抵抗の戦略として「ニグロ」の連帯を説いた。コベナ・マーサーのすぐれた論文「1968 年を時代区分する」[29]で明らかになったように、この「ニグロ」は身分確認の合言葉として世界を駆けめぐり、それまで自分たちを「ニグロ」だとは意識したこともなかったカリブ系イギリス移民も、ひいてはアウトローの白人にまで「白いニグロ」と意識させる。当時のスローガン「人びとにパワーを（Power to the People）」で想定されていた人びととは、人種差別などの不合理な社会差別を受けてきた人びとを当然指していた。しかし、こうした連帯のレトリックには盲点があった。有色の移民か、でなければ何らかの「ニグロ」性をもたない人びとを敵と同定してしまったのだ。しかも、「ニグロ」性がないことがもうそれだけで悪いことであるかのように。マーサーが的確に分析したように、その状況に乗じて新右翼の巻き返しが始まる。1968 年当時、極端な保守派で知られた政治家イーノック・パウエルは、この「沈黙させられている国民の大多数」の声を代弁して、移民の制限を声高に主張したのだ。そこでもスローガンは、「人びとにパワーを」であった。

5．結びにかえて

こう見てくると、「1968 年」の新ニューレフトは、旧世代のニューレフトを周縁に追い込みながらも、やはり同じパラダイムで考えていたと言わざるをえない。頭に「新」や「ポスト」をつけた運動は、どうもその後につづくことば（ニューレフトであれモダニズムで

---

[28] Jean-Paul Sartre, 'Itinerary of a Thought: Interview with Jean-Paul Sartre,' *New Left Review* 58 (November-December, 1968), p. 62.

[29] Kobena Mercer, ' "1968": Periodizing Politics and Identity,' in *Cultural Studies*, ed. Lawrence Grossberg et al., (New York: Routledge, 1992), pp. 424-449.

あれ）を、たんに時代遅れに見せようという性急な衝動にすぎないようだ。新ニューレフトもメトロポリスで考えた。日本の鉄鋼労働者や中国の農民が、システムにより搾取されつづける都会の裏路地生活者と重なるときは有能力化されても、それと重ならなければ未発達文明の農奴となった。また、メトロポリスに生活するさまざまなマイノリティに次々にパワーを与えるかに見えて、その実、敵を同定するためだけの方便でしかなかった。新ニューレフトの性急さは、旧ニューレフトの悠長さ、「長い革命」への反発から生まれたものである。「会ったことのない人びとと新たに出会って」、新しい関係構築を目指し、民主化の「長期的なプロジェクト」を「短期的なプロジェクト」で取り替えないという信条が、ウィリアムズの「モダニズム政治学」だった。それと比較したら、「1968 年」が独特の熱気のなか性急さに走ったのは明らかだ。「1968 年」はひとつの明確なシステム矛盾に「敵対する」連帯を、敵をあぶりだすためのアイデンティティ・ポリティックスを前面に押し出したのだから。その「1968 年」の経験から、ホールの「分節＝接合」論が出てきたことも特筆すべきかもしれない。ひとつの意味ある集合（センテンス）につながるために、母音を子音で分節するという発想は、さまざまな「違い」が雑居する 21 世紀社会を全体としてとらえるための指標でありつづけている。ただ、分節の方法が依然として精査されていないのだ。「違う」から分節するというだけでは、「1968 年」型の敵／味方同定のレトリックに陥りやすいし、文化多元主義の弊害を乗り越えられない。今のところ「分節＝接合」論は、未完の全体論である。

飛躍しすぎる危険を冒すが、日本のことを最後に振り返ってみたい。というのも、わたしには以前から疑問に思っていることがあるからだ。「全学連」というわたしが経験しえなかった集合体について、語られるときはなぜいつも敵対や分裂の話に集中するのだろうかと。名前に負っている「全」が何らかのかたちでなしえられたとすると、どのような接合のプロセスがあったのだろうかと。1960 年代には欧米のメディアを通してすでに英語化していた「Zengakuren」という語を、『オクスフォード英語辞典』で調べてみると、こう定義されている。「極左の学生運動。**国内**政治への暴力的介入を特徴とする」（強調筆者）。他方、『広辞苑』でも『小学館国語大辞典』でも、「全学連」は 1948 年に結成され、1949 年にプラハに本拠地を置く「国際学生連盟（IUS）」に加盟したことが特記されている。この連盟は後にこそソ連偏重型の党派性のために求心力を失うが、もともとは 1930 年代に全体主義が台頭するなか、プラハやロンドンの学生たちが緩やかに連帯して、全体主義に抵抗しようとしたものだった。まさしく、1930 年代のモダニズム政治学の産物だった。近年の「1968 年」再考の流れのなか、わたしたちは「全学連」を経験した人びとの個人的回想や 1960 年代という（激動の？）10 年に起きた出来事を知ることができるようになった。それでも、20 世紀のモダニズム政治学が「全学連」とどのように分節＝接合し、それが「1968 年」にどのような残照を残したのか、わたしたちはまだ何も知らない。それを知るための作業は、「全学連」を経験した世代とそれを知らない世代との対話を通してのみ、おそらく可能になるのではないかと思う。